

武門源氏の思想と信仰 —忠義の思想と八幡信仰をめぐって—

大山 眞一
日本大学大学院総合社会情報研究科

Philosophy and Faith of Samurai Clan of Minamoto —Discussion of Philosophy of Loyalty and Hachiman God Worship—

OYAMA Shinichi
Nihon University, Graduate School of Social and Cultural Studies

One major factor that determines the establishment and survival of a samurai clan is its militaristic strength. Especially the leader of a clan had to have absolute, almost divine strength. That required the deification of the clan leader and this exerted mental regulation among the clan members. Such regulation can be rephrased with philosophy and faith of the clan. In this paper, a focus is given to the Minamoto clan described in “Tale of Mutsu (Mutsuwaki)” and “Tale of Taira Clan (Heike Monogatari)” to find the relation between the philosophy of loyalty and Hachiman God worship with a view to clarifying the philosophy and faith of the samurai clan. The clan leader also needed to have a skill for controlling the mind of the members so as to regulate the philosophy and faith of the clan. Consideration is also given to the strength, character and generosity of the leader Yorinobu as depicted in “Anthology of Tales from the Past (Konjaku Monogatari)” to take a close look at the human nature of a clan leader who was the basis of the samurai philosophy and faith.

序

『将門記』の主人公である将門（？-940）は新皇と称して東国の独立化を図ったが、そもそも、平将門の乱は朝廷に取って代わる本来の謀反ではなく、現体制を容認しつつ東国における擬似国家を目指したのがその真相といえよう。一族の私闘から偶発的に謀反の首謀者に祭り上げられた将門には、もともと新国家に対するイデオロギー的発想は認められない。従類・伴類との主従関係¹に基づく古代兵（つわもの）社会には、中世武家社会の如き確固たるヒエラルキーが欠如し、武士の存在理由を明確に示すイデオロギーも未成熟であった。これらが将門の独立国家の野望を打ち砕いた遠因となったものと思われる。時期尚早の感は否めない。

ところが、将門を滅ぼした平貞盛（？-989）や藤原秀郷（生没年不詳）、そして源経基（生没年不詳）らの系譜が、官僚組織において官位を与えられ軍事

貴族化した武門の棟梁、中世武士の祖となっていたのである。このような兵の軍事貴族化は、承平・天慶の乱（935-941）で危機的状況に陥った朝廷の正当性を万人に知らしめたことを意味する。中央軍事貴族の政府への進出と軌を一にするように、藤原氏の摂関体制や天皇家の院政が確立し、朝廷の政治体制は揺るぎないものとなった。しかしながら、諸刃の刃である兵を軍事貴族として中央政府の体制内に組み込んだ朝廷は、彼らに武士政権に繋がる武門の形成を黙認した結果、貴族社会自体を弱体化させることになった。

本稿の考察にあたっては、『陸奥話記』に描かれた世界を、兵が武士となって武門を形成する過程と捉える。そして、武門の中でも武門源氏に焦点を当て、その武門の棟梁の実像から彼らの思想や信仰に迫りたい。

そもそも、武門（武家）というイエの成立や存続

の要件には何が求められるだろうか。先ず、棟梁の貴種性である。天皇家の血筋である貴種性が武門を統率する絶対的な要件となる。桓武平氏や清和源氏といった天皇家に繋がる血統が臣下にとって絶対的権威となり、円滑な武門の統制に繋がるのである。その貴種性に加え、次に述べる要件に適う者が棟梁となって武門の象徴となる。武門の成立や存続に関わる決定的な要件は実質的には武力や武威であるといっても過言ではない。しかも、武門の棟梁の持つ武力や武威は、絶対的な強さ、つまり神がかり的な強さを秘めていなければ、臣下は彼を武門の棟梁として認めはしないであろう。ゆえに、武門の武力や武威を絶対化させるために、その棟梁を神格化させる必要があった。棟梁の神格化は武門の臣下に対する精神統制に他ならない。そして、その精神統制は武門の思想・信仰と言い換えられよう。絶対的な思想と信仰の統制が武門の成立と存続の最大要件となってくるのである。そこで、武家社会に共通した思想と信仰が求められたのである。武門の忠義の思想と源氏の八幡信仰がその関係をよく示している。これから考察する初期武家社会は、中世の如き「ご恩と奉公」に基づく御家人体制には程遠く、武門の思想と信仰の統制も未だ構築段階にある点是否めない。しかしながら、『陸奥話記』においては君臣間の忠義の思想や八幡信仰の記述が散見される。この忠義の概念は、頼朝の時代の「ご恩と奉公」の思想や鶴岡八幡宮の信仰に繋がっていくことは間違いないであろう。

本稿では、『陸奥話記』や『平家物語』に記述された武門源氏に焦点を当て、忠義の思想と八幡信仰の相関関係を見出し、武門の思想や信仰の実態に迫ることが大きな狙いとなる。また、武門の思想と信仰統制の象徴である武門の棟梁には、臣下を束ねる人心掌握術が不可欠となる。そこで、『今昔物語集』に記された武門の棟梁（頼信）の武威・人柄・寛大さを取りあげ、武門の思想、信仰を支える棟梁の人間性にも迫りたい。次に、『将門記』以降の兵から武門を形成する武士の変遷に触れてみたい。

1. 武門の棟梁

朝廷は、平貞盛と藤原秀郷をして、兵の擬似国家

を目論んだ将門の野望を粉碎せしめた。論功行賞では、秀郷は従四位下・武蔵、下野両国主、貞盛は従五位上・右馬寮右馬介、経基は従五位下・太宰権小式に任ぜられる。当初、平将門を誣告（乱後、密告扱いとなる）した源経基にも恩賞が与えられた。そして、彼らは軍事貴族として中央政府の枠の中に組み込まれる。この段階で、独立国家を試みた兵は、再び朝廷の傭兵的存在に呼び戻される格好となった。皮肉なことに、兵はこれ以降、それぞれの武門の形成段階に入り、後世の保元の乱（1156）・平治の乱（1159）において武士の政権を勝ち取る結果になるのである。

承平・天慶の乱で功績を納めた桓武平氏（平貞盛）、秀郷流藤原氏（藤原秀郷）、清和源氏（源経基）の三大武門が中央において鼎立し、それぞれの緊張関係の中で独自の武門を形成していく。この三大武門の中では、桓武平氏と清和源氏の系統である源・平両氏が代表的な武門として確立し、勢力を拡大していった。一方、秀郷は坂東を中心に下野・武蔵国の国守や鎮守府将軍に任ぜられたにもかかわらず、源平両氏のように中央政府との繋がりが密ではなかった。そこで秀郷流武門の発展を目論んだ秀郷の子千晴は中央政府に進出したが、安和二年（969）に勃発した安和の変²に巻き込まれ、隠岐に流されてしまう。この事件の背景には天皇家の後継をめぐる藤原氏の陰謀と源経基の子満仲と千晴との勢力争いがあったと考えられる。この段階で、秀郷流藤原氏は軍事貴族として中央政界から姿を消し、古代の兵は中世武士を代表する源・平両武門に二分されていくのである。

本稿においては、武門を代表する源・平二大派閥の中でも、特に清和源氏の系統に考察の的を絞りたい。平氏も源氏に劣らぬ武門を形成したが、やはり武門の棟梁といえば、源氏に代表されるのではないだろうか。ところが、その源氏の祖ともいべき源経基は、『将門記』においては、坂東武者としての活躍は皆無で、むしろ卑怯者の印象が強い。武蔵国の武蔵権守興世王（？-940）・介源経基と足立郡司武蔵武芝（生没年不詳）が租税の件をめぐる対立していたところ、将門の調停によって、和解に落ち着いた。しかし、手打ち式に遅れた経基一行を武芝軍が襲うという手違いが起こった。裏切りと誤解した

経基は上洛し、将門・興世王・武芝らに謀反の意ありと訴え出たのである。『将門記』作者が、「介経基は、未だ兵の道に練れず。驚き愕いで分散すと云ふこと、忽ちに府下に聞ゆ」³と経基を評しているところから判断すると、彼の若年で経験不足の兵像が想像できる。その他、臆病で猜疑心が強い経基が記されていて、とても源氏棟梁の器とは考えがたい。しかも、承平・天慶の乱後も目立った活躍をすることなく、正五位下の官職で死去したとされる。元木泰雄は、「承平・天慶の乱の功労者でありながら経基は武士として認識されていなかった。その原因は大した武功がなかったことと、武門の基盤として継承される所領や武士団を形成できなかったことにあつたのではないだろうか」⁴と述べている。元木は、武門の成立と存続には所領や武士団が必要不可欠であると指摘しているが、言外の意味では、武門を束ねる棟梁には絶対的な武力・武威が備わっていなければならないことを示唆しているように思われる。その意味で経基は不適格者といわざるを得ない。

しかしながら、経基の子満仲（？-997）は藤原北家の最後の他氏排斥として知られる安和の変で、密告者として暗躍し摂関政治の確立に寄与することになる。この摂関体制と、続く院政の時代は正に武士が中央政府の内奥、つまりミウチ政治に関与する時期にあたり、武士が武門を形成する熟成期間であつたといえる。その中央政府との密なる関係を保つには、軍事貴族としての在住の場所が問題となる。地方の所領に在住するか京に在住するか、という問題である。満仲の所領は摂津国（兵庫県）川辺郡多田にあつたが、基本的には在京体制をとつた。後世の平清盛も六波羅に在住し、中央政府と不即不離の関係を保つことは武門の棟梁として必要不可欠な条件であつたと考えられる。

満仲の三男源頼信（968-1048）は、河内国古市郡壺井（大阪府羽曳野市）を本拠とし河内源氏の祖となつた。実のところ、武門の棟梁と称される地位を確立したのは満仲の三男源頼信を初めとする、頼義、義家の河内源氏三代である。河内源氏初代の源頼信は、平忠常の乱（1028）⁵を鎮圧し坂東に武門統制の布石を打つた。子の源頼義、孫の義家の時に、前九年・後三年の役で坂東武士を傘下に収め、特に八幡

太郎義家の時に代表的な源氏の棟梁となつた。次に、武門の棟梁の資質である人間性について考えてみたい。

2. 武門の棟梁の資質

さて、武門の成立と存続には、武力、経済力が優先順位の高い要件となるのはいうまでもないが、それ以外にも重要な要件がある。棟梁としての資質である。その資質には人間性が問われ、特に武威、人柄、寛大さが反映されたものでなければならない。後述する武門の思想である忠義の観念にはこの人間性が大きく左右する場合があると思われる。源氏棟梁の中でも、説話集に登場する頼信は人間性溢れる理想的な武門の棟梁として描かれている。

『今昔物語集』巻第二十五本朝付世俗には、①源頼信朝臣、責平忠恒語第九、②依頼信言平貞道、切人頭語第十、③藤原親孝、為盗人被捕質依頼信言免語第十一、④源頼信朝臣男頼義、射殺馬盗人語第十二の四つの説話が収められている。これらには頼信の武門の棟梁としての資質、武威・人柄・寛大さ等が余すところなく描写されている。別けても、武威が武門の棟梁を決定づける大きな要件といつても過言ではない。武威とは武門の威光と言い換えられる。単なる武力に裏づけられた威光のみならず、人格的威光、つまり武門を代表する棟梁の知識と知恵、心ばえや人柄、寛大さといった諸要素に裏づけられた複合的、且つ全人的な威光と捉えられよう。このような全人的な武門の棟梁像が自他共に求められたことが、後述する武門の思想、つまり忠義の思想の定着に大きく寄与したと考えられる。それでは、その理想の棟梁像を『今昔物語集』①～④で確認しておきたい。

①源頼信朝臣、責平忠恒語第九は、頼信の武威により平忠常の乱を鎮圧した説話であるが、忠常の館を攻める際に「家ノ伝へ」⁶によって湖沼の浅瀬を渡ってきた頼信に、忠常は畏怖の念を抱いて、降参してしまう。「家ノ伝へ」とは、武門相伝の戦略の教えであり、このような地形学的情報の集積も含め、あらゆる戦略的知識と知恵を備えていることも武門の棟梁の資質と考

えていいだろう。

②依頼信言平貞道、切人頭語第十は、源頼光の家臣平貞道が頼信にある男の殺人を依頼されたが、埒もないと捨て置いていた。しかし、偶然その男に会うと、頼信の見抜いたとおりの無礼な人となりを知り察知する。貞道は、人となりを見抜く頼信の慧眼に恐れ入り、その男を射殺してしまう。そして、「平カニ過テ可行カリシ奴ノ、由無キ言ヲ一言云テ、被射殺ニシカバ、河内殿ノ不安デ思シケル事ノ故也ケリ。哀レニ忝キ人ノ威也ケリ」⁷と頼信の武威を人々に伝えた。これを聞いた者は頼信に畏怖の念を抱いたのである。この説話は武門の棟梁である頼信と陪臣である貞道との主従関係を見事に描き出している。

③藤原親孝、為盗人被捕質依頼信言免語第十一は、頼信の乳母子藤原親孝の幼い男の子が盗賊の人質になったところ、頼信は狼狽する親孝に武士の心得を諭し、且つ盗賊を説得し男の子を無事解放させた。そして、約束どおり子どもを解放した盗賊に食料や馬まで与えて逃がしてやった。頼信の棟梁としての人柄や寛大さが伝わってくる説話である。編者も「盗人モ、頼信ガ一言ニ憚テ、質ヲ免シテケム。此レヲ思フニ、此ノ頼信ガ兵ノ威糸止事無シ」⁸と頼信の武威に賛辞をおくっている。

④源頼信朝臣男頼義、射殺馬盗人語第十二は、頼信が東国より取り寄せた名馬が馬盗人に奪われたが、子の頼義（985-1078）と共に逢坂山で奪い返す説話である。父子間の以心伝心の連携により馬を奪い返す描写から、非常時を想定した武門棟梁の日頃の心構えや鍛錬が垣間見られる。③同様、『今昔物語集』編者は「怪キ者共心バへ也カシ。兵ノ心バへハ此ク有ケルトナム語り伝ヘタルトヤ」⁹と一般人とは異なる武門の棟梁父子の心ばえを称えている。

以上のように、武門の棟梁としての要件には、人格的威光が反映された武威、つまり棟梁の知識と知恵、心ばえや人柄、寛大さといった全人的な威光が求められたのである。頼信の時代に、源氏武門の棟梁の資質が伝説化されたことで、武門を束ねる棟梁としての思想が形成され、子の頼義、孫の義家の段階で武門の棟梁像は神域に達するのである。

3. 武門源氏と忠義の思想

先に述べたように、承平・天慶の乱後、坂東武者はそれぞれ軍事貴族として中央政府の枠の中に組み込まれた。この段階で、独立国家を夢見た将門の如き兵は完全に駆逐され、将門に勝利した兵は朝廷の傭兵として、また武士として武門を形成していったのである。承平・天慶の乱で功績を納めた桓武平氏（平貞盛）、秀郷流藤原氏（藤原秀郷）、清和源氏（源経基）の三大武門が中央において鼎立し、それぞれの緊張関係の中で独自の武門を確立した。武門とは家の系統であり、末代までの武家の繁栄が約束された生業が求められる。源氏などの中央軍事貴族は中央政府に取り込まれながらも、領地は地方に求めなければならなかった。坂東の地は将門の乱以降、桓武平氏の地盤であった。『陸奥話記』の舞台となる奥州の豊かな利権をめぐって、平忠常の乱以降は、源頼信、頼義、義家に従う平氏武門が増加していった。平忠常討伐に失敗した平直方（生没年不詳）は、武門の血を絶やさないうちの方策として、娘を取って源家の頼義に嫁がせる延命策をも厭わなかった。『陸奥話記』にはこう記されている。上野守平直方朝臣、其の騎射に感じて、窃かに相語りて曰く、「僕不肖なりと雖も、苟も名称の後胤為り。偏に武芸を貴ぶ。而れども未だ曾て控弦の巧の、卿の如く能くする者を見ず。請ふ、一女を以て箕箒の妾と為んことを」¹⁰。こうして生まれたのが八幡太郎義家であった。義家は生まれながらにして源・平両武門の血を引き継ぐ絶対的な武門の棟梁となったのである。

坂東の地は古代より防人や奥州蝦夷征伐の兵站基地として名高く、源・平以外の豪族も取り込む必要があった。それには、武力もさることながら、これらの豪族を束ねるための思想と信仰の統制が武門に求められてくるのである。また、武門の存続を確か

なものとするためにも、新たな絶対的な思想と信仰が必要となったのである。それが、忠義の思想と八幡信仰である。八幡信仰は後述するとして、源氏の棟梁と臣下の忠義がうかがわれる記述を『陸奥話記』から七例ほど抜き出してみよう。

①経範が曰く、「我將軍に事へて已に三十年を経たり。老僕の年、已に耳順に及び、將軍の齒、又懸車に逼れり。今覆滅の時に当りて、何ぞ命を同じくせざらんや。地下に相従ふは是吾が志なり」と。還りて賊の囲みの中に入る。其の随兵の両三騎、又曰く、「公既に將軍と命を同じくし節に死す。吾等、豈独り生くることを得んや。陪臣と云ふと雖も、節を慕ふことは一なり」と。共に賊陣に入りて、戦ふこと甚だ捷し¹¹。

黄海の戦いで頼義が行方知れずとなった。將軍頼義の家臣佐伯経範は忠義を尽くして頼義搜索のため敵陣の中に入っていった。すると、経範の郎従二、三騎も、下線部のように、「主君が將軍(頼義)に忠義を尽くして運命を共にしようとしているのに、我らのみ生き残ることはできない。陪臣といえども忠義の気持ちは同じである」といって経範の後を追っていったのである。陪臣であっても、『将門記』における利害関係重視の判類のような希薄な主従関係にはなかったようである。

②「吾、彼の骸骨を求めて、方に之を葬斂せん。但し兵革の衝く所、自づから僧侶に非れば、入りて求むること能はざらん。方に鬢髪を剃りて遺骸を拾ふのみ」と。則ち忽ちに出家して僧と為り、戦場を指して行く。道に將軍に遇ふ。且つ悦び且つ悲しみ、相従ひて逃れ来れり。出家劇しきに似ると雖も、忠節は猶感ずるに足れり¹²。

將軍頼義の家臣藤原茂頼は、行方知れずとなった頼義が既に敵方によって命を奪われたと思った。戦場で頼義の亡骸を探すには、僧形でなければ許されないため¹³、その場で鬢髪を剃り出家して戦場に向いていった。すると途中で頼義と遭遇した。再会

を悦び、茂頼は頼義の後について逃れた。下線部は、茂頼の忠節が人の心を打って余りあるという作者の感慨であるが、武門における主従観がうかがえる場面である。

③是に於て、武則、遙かに皇城を拝し、天地に誓ひて言く、「臣既に子弟を発し、將軍の命に応ず。志は節を立つるに在りて、身を殺すことを顧みず。若し苟も死せずば、必ず空しく生きじ¹⁴。

將軍頼義は出羽千北の俘囚の首領の清原光頼とその弟武則を官軍の味方につけることに成功する。すると朝廷は清原一族の者等を押領使に任じた。感激した武則は京の皇城を遥拝して、下線部のように、皇室に忠節を立てることが望みで、そのためには命など惜しくない、といい切っている。武則は皇室に忠節を立てるといっているが、広義には頼義にも忠節を立てると解釈していいだろう。

④時に將軍、武則に命じて曰く、「昔、勾踐、范蠡の謀を用ゐて、会稽の恥¹⁵を雪ぐを得たり。今、老臣、武則の忠に因つて、朝威の嚴を露さんと欲す。今日の戦に於て、身命を惜しむこと莫れ」と。武則曰く、「今、將軍の爲に命を棄てんこと、軽きこと鴻毛の如し。寧ろ賊に向ひて死すと雖も、敵に背けて生くることを得じ」と¹⁶。

將軍頼義は「臥薪嘗胆」で知られる越王勾踐の会稽山の雪辱の例をあげ、下線部のように、「武則を勾踐の忠臣范蠡に譬え、命を惜しんではならぬ」といい放った。すると、武則は「頼義のために命を棄てることは鴻の羽毛一枚のように軽く思い、たと死んでも敵に背は向けない」と答えた。正確には、武則は頼義の家臣ではなく同盟者であるが、頼義は武門の忠義を同盟者に要求しているのである。このことから、武門の思想が出羽千北の俘囚にも支持されていたと考えられる。武門の思想イコール武門の棟梁に対する忠義の思想と捉えられるが、あくまでもその忠義の大義名分は朝廷にある。しかし、その忠義の思想は、中世以降の武者の世には武門の棟梁に対する絶対的忠義に変容していった。この思想は武

門の棟梁に対する「忠義→服従→死」という図式で表すことができるが、今後、長きにわたって家臣の盲従的な主従観として武家社会に定着していくのである。

⑤將軍、營に還り、且つ士卒を饗し、且つ甲兵を整ふ。親ら軍中を廻り疵傷者を療す。戰士感激し、皆言ふ、「意は恩の為に使はれ、命は義に依って軽し。今將軍の為に死すと雖も恨みず。彼の鬚を焼き膿を啜りしも¹⁷、何ぞ之に加ふるを得ん」と¹⁸。

陣營に引き返した將軍頼義は將兵たちを饗応し、甲冑や武器を用意した。そして、陣中をめぐる負傷兵らを自ら手当とする。すると、彼らは、下線部のように、「心は將軍に受けた恩のためにあり、義のためには命さえ軽いものだ。今は將軍のために死んでも恨みに思うことはない」といった。武門の棟梁たるもの、兵らに誠心誠意尽くさなければならない。飴と鞭の使い分けが肝要だが、戦の合間に、兵を労い、棟梁の恩義を与えることが、臣下の忠義心を惹起することになる。

⑥將軍、武則に語つて曰く、「頃年、鳥海の柵の名を聞きて、其の体を見ること能はず。今日、卿の忠節に因りて、初めて之に入るを得たり。卿、予が顔色を見ること如何」と。武則曰く、「足下多く宜しく王室の為に節を立つべし。(中略)天地、其の忠を助け、軍士、其の志に感ず。是を以て、賊衆潰え走ること、積水を決する如し。愚臣、鞭を擁して相従ふのみ。何の殊功か有らん。(後略)」と¹⁹。

將軍頼義が鳥海の柵に入城できたのも武則の忠節のお陰だというと、下線部のように、「あなたが皇室のために忠節を立てようとしたのを天地の神々が助けたのです。兵士はその志に感じ入ったのです」と答えた。「天地、其の忠を助け」とは皇室の正当性を認めた天命思想²⁰と考えられるが、武門の忠義の思想が融合している点が興味を惹く。本来同盟者である武則は、愚臣である自分には功績はなく、ただ將

軍頼義に従ったまでである、と謙っている。この武則の思想は、④同様、武門の棟梁に対する「忠義→服従→死」という図式に直結した家臣の盲従的な主従観と考えられる。

⑦將軍、馬より下りて、遙かに皇城を拝し誓つて言く、「昔、漢の徳未だ衰へず、飛泉忽ちに校尉の節に応ず。今、天の威惟れ新なり、大風老臣の忠を助くべし。伏して乞ふ、八幡三所、風を出して火を吹きて彼の柵を焼くことを」と。則ち自ら火を把りて神火と称して之を投ず。

(①～⑦の下線は引用者)

官軍が厨川、姫戸の柵を焼き払おうとした時、將軍頼義が下馬し、はるか皇居を拝した。そして、下線部のように、「昔、漢王朝の威徳は未だ衰えず、宮城を守る校尉耿恭の忠節に応じたように、今、天の威徳はあらたかであるので、大風が吹いて老臣の忠義を助けるであろう」と宣誓したのであった。頼義がいった「天の威」とは⑥同様、天命思想と考えられる。

以上、七例をあげて源氏の棟梁と臣下の忠義について考察したが、武門の忠義思想を表す「忠義→服従→死」という図式は朝廷への忠義が大前提となる。そして、朝廷の勅命を受けた武門の棟梁は家臣に対して同質の忠義を求めた。したがって「忠義→服従→死」の図式はそのまま家臣から武門の棟梁への忠義の図式となったのである。言い換えるならば、絶対的な朝威は、「朝廷→武門の棟梁→臣下」という図式で上意下達され、臣下の忠義は「臣下→武門の棟梁→朝廷」という図式で下意上達されるのである。このような朝威忠義の伝達統制は、武門の棟梁の媒介によって始めて成り立つものである。

4. 武門源氏と八幡信仰

八幡信仰は、豊前国(大分県)宇佐地方の豪族宇佐氏の御許山の神体山信仰と、五世紀初頭、新羅系渡来集団がもたらした新羅神が融合した神(八幡神の源流)に源を発する。その神体山信仰が鍛冶神と海神等の信仰へと変遷していったのもその頃かと考えられる。六世紀後半には宇佐氏が衰退し、大神比

義氏がその融合神に応神天皇の神霊を付与したことで八幡神が成立し、皇族や武士等の幅広い信仰を集めるようになったのである。八幡信仰は神仏習合(本地垂迹)の変遷の歴史と言い換えられる。元来、自然崇拜を起源とする神祇信仰には思想性よりは、深い信仰性のみが求められてきた。したがって、仏教が伝来し全国的にその信仰が広まってくると、神祇信仰にとっては、教義に基づく理論的な仏教との習合が生き残りの手段となっていくたのである。例えば、神威が衰えた神が仏法により神威を増すという神身離脱思想、神威の衰えた神を救い護るために神社の傍らに寺院を設ける神宮寺化現象等は神仏習合の顕著な例である。特に、神仏習合の影響を色濃く受けた八幡大菩薩²¹の顕現は信仰者の理解を得やすいものとした。

八幡信仰を権威づけたのは次にあげる二つの出来事による。一つには八幡社が天平三年(731)に官幣²²に預かったことであり、もう一つは、天平十九年(747)に朝廷が宇佐に使者を遣わし、八幡神に大仏造立成就を祈願したところ、「神皇、天神地祇を率いぎなひて、成し奉つて事立て有らず。銅の湯を水と成すがごとくならん。我が身を草木土に交へて、障へる事無く成さん」という大仏造立協力の託宣²³を発したことである。これらの出来事で、地方神であった八幡神は中央に進出する絶好の機会を得たのである。時代が少し降って、貞観元年(859)、藤原良房の意向により、奈良大安寺の僧行教が八幡神の託宣を受け、京都石清水男山に石清水八幡宮が創設された。平安後期には前九年の役(1051-1062)の折、源頼義が石清水八幡宮に祈願して東北に赴いたが、平定後、康平六年(1063)、頼義は鎌倉の由比郷に石清水の八幡菩薩を勧請した。後に、頼朝が由比郷から小林郷へ八幡宮を遷し「鶴岡八幡新宮若宮」と呼んだが、建久二年(1192)には社殿が大火に見舞われたため、頼朝は改めて石清水から八幡菩薩を勧請し現在の鶴岡八幡宮を創設したのである。

東大寺の大仏を建造中の天平勝宝元年(749)、宇佐八幡の禰宜の尼が上京して八幡神が大仏建造に協力する旨の託宣を伝えたという記録があり、早くから仏教と習合していた事実がわかる。後に、本地垂迹においては阿弥陀如来が八幡神の本地仏とされた。

平安時代以降全国に八幡神社が勧請されたが、武士の信仰を集めたのもその要因の一つとして考えられる。また、神仏習合や本地垂迹思想が広まると、八幡神は八幡大菩薩や僧の姿の僧形八幡神に変容していった。武家においては八幡大菩薩という呼称が一般的であろう。

そもそも、源氏と八幡神の結びつきにはどのような経緯があったのだろうか。源氏と八幡神宮との関係は、源経基の子信頼が永承元年(1046)、石清水八幡宮の神前に捧げた告文に見出せる。そこには、八幡大菩薩を源氏の氏神とし、その加護を願う旨が記されている。その後、頼信から頼義、義家²⁴そして頼朝へと八幡大菩薩は代々源氏の氏神として受け継がれていくのである。

武門の存続を担保するもの。それは、武力と経済力であろう。特に経済力は貴族、武士を問わず、彼らの生業を継続させるための重要な要件である。では、その経済力はどこから生み出されるのだろうか。全国各地に分散された所領である。その所領を守るためには、抑止力と防衛力を備えた武力が必要になってこよう。そこにこそ武門の存在意義が生じてくる。土地に関わる闘争は、古今東西を問わず人類の歴史に大きな影響を与えてきたが、古代・中世の武士はどのように向き合ってきたのであろうか。所領に関わる暴力的な武力や経済力の諸問題を正当化させるために、何らかの大義名分が必要だったのでないだろうか。彼らの経済力を保証する所領を防衛するための武力や権威を正当化し、臣下を統制するための思想や信仰を統一化する必要があったのではなかろうか。その統一化のためには朝廷に権威づけられた、由緒ある信仰統制の構築が急務だと考えたのではなかろうか。だからこそ、頼信はそれらを満たす石清水八幡宮の八幡大菩薩を源氏の氏神として選択したのであろう。所領に関わる氏神²⁵と鎮守²⁶そして産土神²⁷の概念は武門のみならず、それに従う地方武士にとっても共通の神々であった筈である。武門の棟梁が臣下を束ねるには、圧倒的な武力や経済力とその裏づけとなる朝廷の権威が不可欠であったと先に述べたが、穿った見方をすれば、信頼は、地方武士を従えるためには、その所領の守護神である氏神をも統一しておきたかったのであろう。

そこで、信頼は武門の氏神を勧請力のある八幡大菩薩に定めた。八幡神こそが、神仏習合を巧みに取り入れ、全国的に展開し得る神であり、八幡信仰こそが万人に受け入れ易い神祇信仰であったからである。

5. 軍記物語における八幡信仰

拙稿、「坂東武者の思想と信仰」では、『源平闘諍録』を手がかりに将門らの兵（つわもの）の信仰が妙見信仰²⁸であった可能性に触れたが、『将門記』には、将門ら坂東武者が別の信仰を持っていたことを示唆する記述がある。では、その部分を引いてみよう。

①時に、一昌伎有りて云へらく、「八幡大菩薩の使ひなり」と儂り、「朕が位を蔭子平将門に授け奉る。其の位記は、左大臣正二位菅原朝臣の靈魂表すらく、右八幡大菩薩、八万の軍起して、朕の位を授け奉らむ。今、須く卅二相の音楽を以て、早くこれを迎え奉るべし」と。爰に将門は頂に捧げて再拝す。況むや四の陣を挙りて立ちて歡び、数千併ら伏して拝す²⁹。

これは、将門が上野国府を占領して、新皇と称した時の出来事である。下線部にうかがえるように、八幡大菩薩の使いとなった巫女が八幡大菩薩と菅原道真の靈魂が将門に天皇の位記を授けるというお告げを發した場面である。おそらくは作者の創作と思われるが、この記述から、将門ら坂東武者が御霊信仰³⁰や八幡信仰を持っていたと推測できる。古代日本では、八百万神の信仰の影響を受けた複数神信仰が支持され、彼らの信仰心が柔軟性に富むものであったことが裏づけられよう。源氏が武門を形成する過程で、この複数神信仰の中から八幡信仰を選択し、彼らの思想と信仰の統制媒体として導入していったと考えられる。その八幡信仰についての記述は『陸奥話記』に散見される。

『陸奥話記』は『将門記』と共に初期軍記物語として人口に膾炙している。前九年の役において源頼義・義家父子が陸奥国における俘囚の長である安倍頼時一族を平定する物語である。『陸奥物語』『奥州合戦記』とも呼ばれているが、その成立は平安時代

後期、十一世紀後期頃と考えられる。作者は不明であるが、陸奥国から奏上された国解（公文書）を参考にした文章が多いという理由で、朝廷に関わる人物ではないかとの見解が有力である。内容は国解に、役に参加した武士の体験談等を交えたものとなっている。ここで、『陸奥話記』の記述から、将門、貞盛以降の軍事貴族の信仰について考えてみたい。次は、將軍頼義が出羽千北の俘囚の首領の清原光頼とその弟武則を官軍の味方につける件である。朝廷が清原一族の者等を押領使に任ずると、それに感激した武則が京の皇城を遥拝して、誓いの言葉を述べるところである。

②是に於て、武則、遙かに皇城を拝し、天地に誓ひて言く、「臣既に子弟を發し、將軍の命に応ず。志は節を立つるに在りて、身を殺すことを顧みず。若し苟も死せずば、必ず空しく生きじ。八幡三所³¹、臣が中丹を照したまへ。若し身命を惜しみて死力を致さずば、必ず神籙に中りて先ず死せん」と。合軍、臂を攘ひて、一時に激怒す³²。

下線部のように、武則は、八幡神社の三柱の神々に自分の中丹(真心)をご照覧くださいと懇願した。もし命を惜しんで死力を尽くさなければ、神の矢に当たって死にましよう、と誓っているのである。この箇所は、家臣に準じた同盟者の武則が既に源氏の八幡信仰を受け入れている根拠と考えていいだろう。これは、俘虜である清原氏が武門の思想と信仰の統制を容認していることを意味する。この段階で、武門の信仰が従うべき地方武士の信仰をも統一化していたものと思われる。

次に、『平家物語』から八幡信仰が記されている箇所を引いてみたい。その件は『平家物語』巻第七 願書にある。源義仲は、俱利迦羅峠の戦いの前に偶然ある神社を目にし、それが八幡様であると知って、たいそう喜び、戦勝を祈願して以下の願書を認めた場面である。

③帰命頂礼、八幡大菩薩は、日域朝廷の本主、累世明君の曩祖也。宝祚を守れんがため、蒼生を

利せむがために、三身の金容をあらはし、三所の権扉をおしひらき給へり。(中略) 就中に曾祖父前陸奥守義家朝臣、身を宗廟の氏族に帰附して、名を八幡太郎と号せしよりこのかた、其門葉たるものの、帰敬せずといふ事なし。義仲其後胤として、首を傾て年久し。今此大功を發す事、たとへば嬰兒の貝をもつて巨海を量り、蟻螂が斧をいからかして隆車に向がごとし。然ども、国の為、君のためにしてこれを發す。家のため、身のためにしてこれをおこさず。(後略)
寿永二年五月十一日 源義仲敬白³³

源頼信を初めとする、頼義、義家の河内源氏三代の武門に属する源義仲が、下線部のように、「曾祖父である前陸奥守義家朝臣が身を八幡大菩薩の氏子となって、その名を八幡太郎と号して以来、その一門で八幡大菩薩に帰依しない者はいない」といい放っている。このことから、源氏の八幡信仰がおしなべて武門の末葉にまで浸透していたと推測できる。

同書 卷第六 廻文 で、源義仲は、従兄弟の源頼朝が謀反を起こし、関東八カ国を打ち従えて、東海道を上って京都の平家を追い落とそうとしているのに刺激を受けた。この件では、義仲は東山・北陸両道を従えて、頼朝より先に平家を攻め滅ぼす決意表明をし、諸国に廻文を發する。次の場面は、義仲が八幡太郎義家の子孫だという正統性について触れているところである。

④十三で元服しけるも、八幡へ参り八幡大菩薩の御まへにて、「我四代の祖父義家朝臣は、此御神の御子となって、名をば八幡太郎と号しき。且は其跡を追うべし」とて、八幡大菩薩の御宝前にてもとどりとりあげ、木曾次郎義仲とこそつゐたりけれ³⁴。

義仲は源氏嫡流の棟梁ではないが、下線部のように、義家に倣って八幡大菩薩の御神前で元服したのである。武門の思想や信仰が傍流にも広がっていることが理解できる。

『平家物語』では、八幡大菩薩が公家、武家の篤い信仰を集めていた記述が随所に確認できる。それ

では、武門の八幡信仰がその傍流や陪臣にまで浸透していたと思われる箇所を引いて参考にしておきたい。

『平家物語』卷第四 鶴には、源頼政が、頭が猿、胴体が狸、尾が蛇、手足が虎の姿をした鶴(ぬえ)退治をする有名な場面がある。次は頼政が鶴を射落とそうとする件である。

⑤日ごろ人の申すにたがはず、御悩の剋限に及んで、東三条の森の方より、黒雲一村立ち来って、御殿の上にたなびいたり。頼政きッと見あげたれば、雲の中にあやしき物の姿あり。これを射損ずる物ならば、世にあるべしとは思はざりけり。さながらも矢とつてつがひ、「南無八幡大菩薩」と心のうちに祈念して、よっぴいてひやうど射る。手ごたへしてはたとあたる。「ゑたりをう」と矢さけびをこそしたりけれ³⁵。

八幡大菩薩は武運の神なので、このような状況では武士が唱えたり、念じたりする、いわば呪的な言葉になり、武士にとって軍神信仰となっていたと思われる。

同書 卷第十一 那須与一 でも同様な記述がある。屋島の戦いで与一が平家の扇の的を射落とす場面であるが、名文としても知られる。次の部分である。

⑥おきには平家舟を一面に並べて見物す。陸には源氏くつばみを並べて是を見る。「南無八幡大菩薩、我国の神明、日光権現・宇都宮・那須のゆぜん大明神、願くはあの扇のまんなか射させてたばせ給へ。これを射そんずる物ならば、弓きりおり自害して、人に二たび面をむかふべからず。いま一度本国へむかへんとおぼしめさば、この矢はづさせ給ふな」と、心のうちに祈念して、目を見ひらひたれば、風もすこし吹よはり、扇も射よげにぞなったりける。与一、鎬をとつてつがひ、よっぴいてひやうどはなつ。小兵といふぢやう、十二東三ぶせ、弓はつよし、浦ひびく程ながりして、あやまたず扇のかなめぎは一寸ばかりをいて、ひふつとぞ射きつたる。

鐘は海へ入りければ、扇は空へぞあがりける。
しばしは虚空にひらめきけるが、春風に、一も
み二もみもまれて、海へさッとぞ散ったりける。
36。

(①～⑥の下線は引用者)

少々引用が長くなったが、下線部で、与一が「南無八幡大菩薩、我国の神明、日光権現・宇都宮・那須のゆぜん大明神」というように、源氏の氏神、八幡大菩薩をはじめとして、地元の諸神を呪文のように唱えている。この例でも、地方武士、陪臣にまで八幡信仰が軍神信仰として浸透していた様子が見られる。

以上の考察から、『将門記』において、源氏以外の坂東武者にも八幡信仰があまり支持されていたと考えられるが、『陸奥話記』や『平家物語』の記述から、八幡信仰が武門源氏の思想や信仰として定着し、武門統制に活用されていたことが理解できよう。

結語

ここまで、『将門記』以降の兵が武士に変容し、武門を形成する過程を古典文学に求めた。具体的には、『陸奥話記』『平家物語』と『今昔物語集』の古典文学から源氏棟梁の実像を探ることで、武門の思想と信仰の相関関係について考察してきた。武門、言い換えれば武家というイエの成立の要件には、まず、そのヒエラルキーの頂点に武門の祖が存在する筈である。しかし、史実では、中興の祖が実質的な武門の祖である場合が多い。源氏を例にあげれば、本稿でとりあげた義家の如き棟梁の存在が武門の形成と存続に決定的な影響を与えている。棟梁には武門を統率する資質が求められる。その資質には人間性が問われ、人格的威光が反映された武威、つまり棟梁の知識と知恵、心ばえや人柄、寛大さが反映されたものでなければならない。そこで、人間性がうかがえる武門の棟梁像を『今昔物語集』巻第二十五本朝付世俗に求め、源氏の棟梁頼信にまつわる四例で確認した。

ところで、武門にとっても政治力や経済力は無視できない。武門の場合は、朝廷における摂関家や天皇家(院)との結びつき、つまり政治力が必須要件となり、その関係によって、豊かな経済力が各地の

所領からもたらされたのである。当然のことながら、その所領を守るためには、抑止力と防衛力を備えた武力が必要になってくる。このように、武門の存在を決定づける大きな要件が武力・武威であることは言を俟たない。その中でも、武門の棟梁の武力・武威は、神がかり的な強さ、つまり絶対的な強さを秘めたものでなくてはならない。軍記物や説話集では、武門の棟梁の超人的な武力や武威が数多く描かれている。

さて、その武力・武威を絶対化させるために、武門のヒエラルキーの頂点に立つ棟梁は臣下や同盟者、果てはその陪臣に至るまでの絶対的な命令系統を確立する必要があったと考えられる。武門の絶対的な命令系統を確実なものにするためには、その背景に武家社会全体に共通した何らかの思想・信仰の統制が必要となってくる。絶対的な思想や信仰統制の構築が武門の成立と存続の最大要件となつてこよう。では、その思想とは何であろうか。それは、忠義の思想である。『陸奥話記』では七例をあげたが、例えば、黄海の戦いで源頼義が行方知れずとなった時、頼義の家臣佐伯経範と彼の郎従二、三騎が頼義を捜索するために敵陣の中に入っていった忠義心で確認できたと思う。本稿においては、武門の思想を武門の棟梁に対する忠義の思想と捉えたが、あくまでもその忠義の大義名分は朝廷にある。しかし、その忠義の思想は、中世以降の武者の世には、実質的に武門の棟梁に対する絶対的忠義へと変容していったのである。しかも、この思想は武門の棟梁に対する「忠義→服従→死」という図式に直結し、家臣の盲従的な主従観に結びついていった。武門の棟梁に対する「忠義→服従→死」という図式は建前上朝廷への忠義が大前提となるが、朝廷の勅命を受けた武門の棟梁に対する臣下の忠義は、武門棟梁の朝廷に対する忠義と同質のものであり、「忠義→服従→死」の図式もまた同質である。絶対的な朝威は、「朝廷→武門の棟梁→臣下」という図式で上意下達され、臣下の忠義は「臣下→武門の棟梁→朝廷」という図式で下意上達されるのである。このような朝威忠義の伝達統制は、武門の棟梁の媒介によって始めて成り立ち、朝廷・武門・家臣の三位一体の関係においてこそ、その効力が最大限に発揮されるのである。

次に、武門の信仰について考察するにあたって、武門の思想と信仰には相即不離の関係にあると考えた。『陸奥話記』『平家物語』において八幡信仰の実態を確認すると、興味深いことがわかった。八幡信仰と忠義の思想の密接な関係が認められるのである。武門における忠義の思想が最も示現するのは、おそらく戦における死であろう。本稿では、武門の思想を「忠義→服従→死」の図式で表したが、潔い死はむしろ誉である。しかし、この図式は死イコール忠義を意味しない。死は武士にとって最悪のシナリオであり、戦いを目前とした武士は、「忠義→服従→武運→生(死)」という図式を考えた筈である。戦に勝利し、生き残ってこそその忠義であろう。そのために武運が求められたのである。その武運に結びつく信仰が八幡信仰だったのである。武士とて命は惜しい筈である。戦いの前に八幡大菩薩に武運を祈念し、朝廷・武門の棟梁に忠義を尽くすというのが武門の思想と信仰の相関関係ということができよう。その関係を如実に物語っているのが、5.『軍記物語』における八幡信仰で例にあげた、清原則武が京の皇城を遙拝して、誓いの言葉「八幡三所、臣が中丹を照したまへ。若し身命を惜しみて死力を致さずば、必ず神籙に中りて先ず死せん」を述べる場面である。則武は死を前提にしているが、実際は身命を惜しまず戦って生き残ることが本音だったのではないだろうか。

以上、『陸奥話記』『平家物語』『今昔物語集』から武門の思想と信仰を考察してきたが、武門のヒエラルキーを構築するためには、武力や経済力の物理的な統制のみならず、武門棟梁の人間性、思想、信仰といった精神的な統制の構築が必要となってくる。絶対的な思想と信仰の統制の構築が武門の成立と継続の最大要件となつてこよう。この絶対的な思想や信仰は、忠義の思想と八幡信仰であったことはいうまでもない。この武門の思想や信仰統制は中世武家社会に引き継がれていくのである。

¹ 拙稿「坂東武者の思想と信仰」(『日本大学大学院総合社会情報研究科紀要』11号、2011年)参照。

² 冷泉天皇の後継をめぐる中務少輔橘繁延と左兵衛大尉源連の謀反が左馬助源満仲と前武蔵介

藤原善時の密告により発覚した事件。これに留まらず、左大臣源高明が謀反に加担していたとされ、太宰員外権帥に左遷された。

³ 柳瀬喜代志・矢代和夫・松林靖明・信太周・犬井善壽校注・訳『将門記・陸奥話記・保元物語・平治物語』小学館、2002年、52頁。

⁴ 元木泰雄『源満仲・頼光』ミネルヴァ書房、2004年、25頁。

⁵ 将門の叔父平良文の子孫が上総・下総・安房国で起こした乱。源頼信が派遣されると忠常は直ちに降伏した。頼信の武門の棟梁として名声が高まった事件である。

⁶ 小峯和明校注『今昔物語集 四』岩波書店、1994年、519頁。

⁷ 同、523頁。

⁸ 同、526頁。

⁹ 同、529頁。

¹⁰ 柳瀬喜代志・矢代和夫・松林靖明・信太周・犬井善壽、前掲書、137頁。

¹¹ 同、148-149頁。

¹² 同、150-151頁。

¹³ 中世における時衆の陣僧を彷彿させるが、陣僧の祖形と考えられよう。

¹⁴ 柳瀬喜代志・矢代和夫・松林靖明・信太周・犬井善壽、前掲書、156頁。

¹⁵ 中国の春秋時代、越王勾銭は会稽山で呉王夫差に包囲されて敗れたが、屈辱的な講和を結ばされた。勾銭はこの恥辱を忘れず、辛苦の末に、忠臣范蠡の兵略により勾銭は夫差を破った。これを会稽の恥を雪ぐという。

¹⁶ 柳瀬喜代志・矢代和夫・松林靖明・信太周・犬井善壽、前掲書、162頁。

¹⁷ 唐の太宗が負傷した兵士を親身になって看病したという故事。

¹⁸ 柳瀬喜代志・矢代和夫・松林靖明・信太周・犬井善壽、前掲書、164-165頁。

¹⁹ 同、169頁。

²⁰ 天の権威を借りて王権の正当性を擁護し、その身分秩序を根底から支えた統治理論。佐藤貢悦『古代中国天命思想の展開』学文社、1996年、112

- 頁。
- ²¹ 天応元年（781年）宇佐八幡は朝廷より鎮護国家・仏教守護の神として八幡大菩薩の神号を授かる。これを機に、八幡神は全国の寺の鎮守神として勧請され、全国的に広まった。
- ²² 中央政府の神祇官から神に奉獻する幣帛を賜ること。官幣に預る意味は、伊勢神宮と同格になったことを意味する。遠日出典『八幡神と神仏習合』講談社、2007年、133頁。
- ²³ 重松明久『八幡宇佐宮御託宣集』現代思潮社、1986年、197-198頁。『続日本紀』巻第十七、天平勝宝元年（749）十二月二十七日条にも同様の記述がある。
- ²⁴ 『尊卑分脈』に次のよう記されている。父頼義が石清水八幡宮で参籠した時、三寸の靈験を賜る夢を見たところ、正夢となった。それを家に持ち帰ったところ、妻が懐妊し、後に義家を出産した。後年、義家七歳の折、石清水八幡宮で元服し、八幡太郎義家と呼ばれる由縁となった。
- ²⁵ 氏神とは、古代の氏族が共同で祀った祖先神や守護神である。
- ²⁶ 鎮守は、土着の神を鎮めて、国、城、寺、村等を守護する神である。平安時代以降、荘園制の発達により、氏族社会は衰退し氏神信仰は変化を迫られた。荘園にその土地の守護神を祀るようになったのである。これが鎮守である。しかし、室町時代に荘園制が崩壊すると、鎮守は氏神に合祀されていった。
- ²⁷ 産土神は、その地域に生まれた者の土地を守護する神である。近世以降、産土神は氏神、鎮守と同一視されるようになった。
- ²⁸ 拙稿、前掲紀要、参照。
- ²⁹ 柳瀬喜代志・矢代和夫・松林靖明・信太周・犬井善壽、前掲書、62頁。
- ³⁰ 天災や疫病の発生を、非業の死を遂げた人間の怨霊の仕業と考え、畏怖鎮魂して御霊に祀り上げることで、祟りを免れる信仰。
- ³¹ 応神天皇、神功皇后、比咩大神の三柱。源氏の氏神で武神として武士の信仰を集める。
- ³² 柳瀬喜代志・矢代和夫・松林靖明・信太周・犬井

善壽、前掲書、156頁。

- ³³ 梶原正昭・山下宏明校注『平家物語』（下）岩波書店、1993年、15-16頁。
- ³⁴ 梶原正昭・山下宏明校注『平家物語』（上）岩波書店、1991年、340頁。
- ³⁵ 同書、256-257頁。
- ³⁶ 梶原正昭・山下宏明校注『平家物語』（下）前掲書、276頁。

(Received: May 31, 2012)

(Issued in internet Edition: July 1, 2012)